

## 【資料】

### 在宅高齢者の口腔ケアに関する国内外の文献検討と看護の課題

#### A Study about the Oral Care of Elderly People at Home that Literature Review and Issues of Nursing in Japan and Abroad

宮坂啓子 福岡看護大学 看護学部 看護学科 地域・在宅看護部門  
松尾里香 福岡看護大学 看護学部 看護学科 地域・在宅看護部門  
山中 富 福岡看護大学 看護学部  
宮園真美 福岡看護大学 看護学部 看護学科 地域・在宅看護部門

### 抄 録

本研究は、在宅療養をする高齢者を対象とした口腔ケアに関する国内外の文献を通して、高齢者の口腔健康に対する研究の動向を把握し、今後の看護実践への示唆を得ることを目的とした。国内文献は、「在宅」「口腔ケア」をキーワードに、医学中央雑誌 Ver.5 Web を用いて検索、選択した 10 件を、海外文献は、“home care” “oral health” をキーワードに、Pubmed-NCBI を用いて検索し 19 件を分析対象とした。国内文献のほとんどは現状調査であった。海外文献の介入研究内容は、「口腔ケアの方法」、「口腔ケア教育」、「口腔ケア尺度」に分けられた。国内研究は、介入研究に至る前の現状把握の段階のものが多く、今後の在宅高齢者への口腔ケア研究の課題として、積極的な介入研究によるエビデンスの蓄積の必要性が示唆された。

キーワード: 在宅, 口腔ケア, 看護, 65 歳以上

### 緒 言

我が国の 65 歳以上の高齢者（高齢者）人口は 3,461 万人（平成 28 年 9 月 15 日現在推計）で、総人口に占める割合は 27.3% となった<sup>1)</sup>。高齢者の死因第 3 位である肺炎は、そのほとんどが誤嚥性肺炎であるといわれており、口腔内の清掃を確実にに行い、歯周病を予防し、口腔内を健全に保つことは誤嚥性肺炎を未然に防ぐことにつながる<sup>2)</sup>。

また、要介護高齢者に対する口腔ケアは、気道感染の予防<sup>3),4)</sup>、摂食嚥下機能の向上<sup>5)</sup>、栄養改善等<sup>6)</sup>に有効であることが示されており、口腔ケアの重要性は認識されている。

しかし、今後ますます増加すると予測される在宅高齢者への口腔ケア支援の状況は明確になっていない。特に、要介護高齢者にとって質の高い口腔ケアは、低栄養や様々な疾患の予防にもつながるものであり、現状を明確にしたうえで口腔ケアを在宅高齢者へ積極的に実践していく必要があると考える。

そこで、本研究では、在宅高齢者を対象とした

口腔ケアに関する国内外の文献検討を通して、研究の動向を明らかにし、看護実践への示唆、および看護の課題を考察する。

#### 《用語の定義》

在宅高齢者：在宅療養中もしくは地域で生活する 65 歳以上の高齢者。病院施設以外の入所施設で生活する高齢者を含む。

口腔ケア：器質的口腔ケア、機能的口腔ケアを含む、口腔健康管理とする。

### 研究目的

在宅高齢者を対象とした口腔ケアに関する国内外の文献を通して、研究の動向と看護の課題を明らかにする。

### 研究方法

国内文献は医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) を使用し、「在宅」「口腔ケア」「看護」「65 歳以上」のキーワードで検索した 47 件中、テキスト、参考書、特集記事、在宅療養中高齢者の口腔ケアに関連し

ない研究を除外した8件、ハンドサーチで選択した2件を合わせて10件を研究対象とした。

海外文献は Pubmed-NCBI を使用し、“home care” “oral health” “Nursing” “Aged:65+ye” “Nursing Journal” をキーワードで検索した。院内での研究と対象者が65歳以下などの171件は除外し、19件を分析対象とした。検索する文献は、2008年～2018年のものとした。

### 分析方法

抽出した論文の、口腔ケアの種類と研究内容について整理・カテゴリ化し、国内外の研究の動向を考察した。本研究は、文献の抽出および整理にあたっては、特定の文献に偏らないよう抽出し、分析を行った。

### 結 果

国内文献10件を、各カテゴリに分類したものを表1に示した。国内文献は現状調査が8件、介入研究は2件のみであった。現状調査の内容は、「器質的口腔ケア」「機能的口腔ケア」「口腔内の細菌数・種類に関する現状調査」「訪問看護師の意識調査」であった(表1)。

器質的口腔ケアでは、口腔ケア実施後は口腔衛生状態が有意に改善されることが確認されていた<sup>7)</sup>。また、義歯を毎日洗浄していた在宅高齢者全体の84%の口腔内の汚染が報告されていた<sup>8)</sup>。

機能的口腔ケアでは、在宅要介護高齢者の嚥下機能が低下していることや、43.4%に誤嚥のリスクがあることが報告されていた<sup>9)</sup>。また、舌運動、口唇運動が構音、嚥下機能と有意な関連を示していた<sup>10)</sup>。非経口摂取の対象者は、口腔衛生状態が悪く、肺炎のハイリスク群であることが示されていた<sup>11)</sup>。訪問看護師の意識調査では、口腔ケアに自信がなく誤嚥予防研修を希望する看護師が多いという報告があった<sup>12)</sup>。また、口腔ケアの困難さの調査において、ケア拒否、家族の協力不足などがあった<sup>13),14)</sup>。介入研究は、いずれも看護師教育による口腔保健行動および認識の変容について報告されていた<sup>15),16)</sup>。

海外文献19件を、各カテゴリに分類したものを表2に示した。

海外文献は、現状調査が9件、介入研究が7件、尺度評価を目的とした研究が3件あった。

現状調査の内容は、「口腔健康と誤嚥、肺炎に関連した調査」「口腔健康と生活状況に関連した調査」「口腔ケア実施者と対象者の意識・態度調査」「栄養摂取状況調査」であった。

現状調査報告は、いずれも数百人から数千人単位の調査であり、統計学的に信頼できる標本数を確保していた。また、口腔ケアの重要性を誤嚥、肺炎の予防<sup>28)</sup>、生活水準や生活環境との関連において示していた<sup>32)</sup>。

介入研究の内容は、「口腔ケア実践」「口腔ケア教育実践」「口腔関連尺度の評価」であった。

口腔ケア実践に関する研究では、器質的口腔ケアにおいて、マウスウォッシュの効果検証や<sup>17)</sup>、機能的口腔ケアにおいて、口腔周囲の訓練や嚥下予防体操の有効性が認められたものがあった<sup>18)</sup>。

口腔ケア教育実践に関する研究は、歯科トレーニング、オーラルケア教育、口腔衛生コース、誤嚥性肺炎予防反復教育プログラムにおいて、口腔ケア実施者を教育することの有効性が示されていた<sup>23)~26)</sup>。

尺度評価に関する研究では、口腔健康評価指標(GOHAI)のトルコ人への適用評価<sup>21)</sup>、認知症高齢者へ口腔を観察する際の、ケア抵抗性を測定する尺度(RTC-r)の評価<sup>20)</sup>、および口腔機能を評価するアセスメントシート(BOHSE)の正確さを評価した研究などがあった<sup>22)</sup>(この研究は日本人が著者であった)。

### 考 察

#### 1. 研究の動向

国内の研究では、器質的口腔ケアや機能的な口腔ケアが口腔衛生や嚥下機能に有意義であることが示されていた<sup>7),10)</sup>。また、在宅高齢者の義歯の汚染や<sup>8)</sup>、誤嚥のリスク<sup>9)</sup>、非経口摂取者の口腔衛生状態の悪化や肺炎のリスクについても明らかにされ<sup>11)</sup>、口腔ケアの重要性が示唆されていた。国内文献の結果からは、今後、在宅高齢者の口腔健康を担う訪問看護師の口腔ケア実践を妨げる要因は2つあり、一つは看護者が口腔ケアに自信がないことであり、もう一つは、対象の口腔

表1 国内文献

カテゴリ	文献番号	著者(出版年)	概要(考察)
器質的口腔ケアの現状調査	7)	寺島(2013)	在宅要介護高齢者の口腔衛生状態と家族が行う口腔ケアの関連について調査した研究。口腔衛生状態は口腔ケア後に有意に改善された(P<0.05)。家族が行う口腔ケア方法は様々であるが、定期的な口腔ケアが有効であり、医療専門職は早期から要介護高齢者の口腔衛生状態と部位による特徴を捉え、口腔ケアに参画する必要がある。
	8)	川上ら(2008)	在宅における後期高齢者31名の自立度、口腔内の状況、口腔ケアの実施状況について調査した研究。寝たきり度B-Cの認知症が約70%を占めていた。全体の約84%は義歯装着で毎日洗浄を実施していたが、口腔内は汚れていた。適切な口腔ケアを行うには、家族・周囲の協力と援助できる看護者が求められる。
機能的口腔ケアの現状調査	9)	森崎(2016)	在宅高齢者225名を対象に在宅要介護高齢者の口腔状況と口腔ケアのステークホルダーについて調査した研究。口腔細菌レベルは高齢者の平均レベルを上回るレベル5以上の者が115名(55.6%)を占めていた。誤嚥リスクが96名(43.4%)であった。在宅要介護高齢者が最も援助をして欲しい人は家族で、ケアマネージャーはリハビリ療法士と答えた。
	10)	森崎(2015)	在宅要介護高齢者218名を対象に、舌運動、口唇運動、顎運動、頸運動、肩運動、腕運動とオーラルディアドコキネシスを評価し、構音機能との関連性について検討した研究。舌運動と口唇運動が構音機能と有意な関連を示し、要介護度と構音機能においても有意な関連が認められた。
口腔内の細菌数・種類に関する現状調査	11)	前田(2011)	高齢の在宅療養者を対象に、経口摂取群と非経口摂取群の口腔衛生状態について検討した。肺炎の病原菌として知られるp.aeruginosaは経口摂取者からは全く検出されなかったが、非経口摂取者においては検出率64.7%、総菌数ともに有意に多かった。非経口摂取者は口腔内の衛生状態は不良で、肺炎のハイリスク群である事が示唆された。
訪問看護師の意識調査	12)	森ら(2018)	在宅要介護高齢者における困難な口腔ケア技術への教育介入プログラム作成の基礎資料とするため、訪問看護師88名より回答を得た。看護師による口腔ケア所要時間は平均6.86±4.06分で、68.2%は一日1~3回実施していた。口腔ケア技術に自信がない人は「基本的なケア方法」「誤嚥予防」の研修を希望する者が多かった。(P<0.05)
	13)	岡田ら(2017)	訪問看護ステーションにおける口腔ケアの現状と訪問看護利用者の口腔の状態に関する質問紙調査を、ステーションNs.75名を調査した。(利用者41名は要介護度、残存歯数などを調査した。)訪問看護師が利用者の口腔ケアで困難を感じる内容は「開口・閉口状態の維持」32件「ケア拒否」が29件「高度の誤嚥リスク」26件、利用者の口腔の状態でも多かったのは「口腔乾燥」であった。
	14)	今福ら(2013)	訪問看護師が在宅脳血管障害後遺症者の口腔ケアを徹底できない理由について調査し、その対策を考察した。訪問看護ステーション158箇所200名の訪問看護師の口腔ケア実施に影響していると推察される要因では、口腔ケア拒否が90%、家族の理解不足が57%、家族の協力が得られないが19%であった。口腔ケア用品の利用など方策を検討する必要がある。
機能的口腔ケアの介入研究	15)	新井ら(2012)	地域で暮らしている高齢者152名に口腔機能向上を促す支援プログラムを用いて、介入前、介入3か月後、6か月後を指標測定し、高齢者の口腔保健行動の変化について検討した。継続した集団・個別での介入プログラムにより、参加者の「口腔への関心」「セルフケアの促進」「セルフケアの強化」の口腔保健行動に変化があり、地域を巻き込みながらのプログラム実施は効果的であった。
器質的、機能的口腔ケアの教育的介入研究	16)	松岡(2009)	特養で働く看護師に口腔ケアに関する研修会および機能訓練指導員らを中心とした口腔ケア実践を行った研究。最初は「大変だ」「できない」などの反応であったが、入所者の口腔状態が向上し、職員の取り組み態度にも変化が現れた。器質的・機能的口腔ケアが実施され、嚥下咀嚼機能の向上、熱発者の減少、笑顔、意欲、コミュニケーションが増加した。

※特養：特別養護老人ホーム

表2 海外文献

口腔ケア介入研究	器質的口腔ケア介入	17)	Kim JO ら(2014)	4%の高張食塩水マウスウォッシュと歯ブラッシング教育を、施設に住んでいる高齢者の40人を実験群(20人)と対象群(20人)に分けて口腔の健康に対する効果を調べた。結果、実験群に、口腔内乾燥、口のブランク、口臭と口腔細菌数の減少が認められた。4%の高張食塩水マウスウォッシュの効果が認められた。
	機能的口腔ケア介入	18)	Nam M(2016)	特養に在住する高齢者に、口腔周囲運動前後の健康の主観的および客観的パラメータを測定した。41人の高齢者(実験群21、対照群20)の実験群に、1日25分、4週間、週6回内外の口腔運動を実施したところ、実験群に、口腔運動機能の改善、唾液分泌、開口サイズの増加、唾液pHの改善、口臭の減少を認めた。口腔周囲運動は高齢者の口腔の健康を効果的に促進することができる。
		19)	Park Y ら(2015)	特養入所高齢者40人を対象に嚥下障害のエビデンスに基づくアルゴリズムをDysphagiaのEvidence-Based Nursing Care Algorithm(ENCAD)実施し、口腔の健康と嚥下障害に特有の生活の質を調査した。6ヵ月間ENCADを実施したところ、口腔の健康、誤嚥のリスクには変化がなく、嚥下障害特有の生活の質(p<0.001)が改善した。
尺度評価研究	RTC	20)	Jablonski-Jaudon RA ら(2016)	特養に入所中の認知症高齢者で口腔衛生に関して拒否のある83人を対象に、改訂された(Revising Resistiveness to Care Scale for Dementia :RTC-r)を使用しその評価をした研究。臨床有効性は、パイロットと介入の研究を通して確かめられ、RTC-rは、認知症の人に対する口腔衛生評価を確実に測定でき妥当性が向上した。
	GOHAI	21)	Ergül S ら(2008)	トルコの地域で生活する101人の高齢者に口腔健康評価指標(GOHAI)を使用して、トルコ語版GOHAI信頼性および有効性があるか調査した研究。Cronbachアルファ値は0.75で、低いGOHAIスコアは、口腔衛生の悪化(p<0.01)と口腔健康状態に対する不満(p<0.05)に関連していた。トルコにおいてGOHAIは65歳の高齢者の評価で信頼性の高い有効な手段であると認められた。
	OSA	22)	Yanagisawa. S ら(2017)	3つのカテゴリー(口腔衛生、咀嚼、および口腔機能)を評価するOral Assessment Sheet(OAS)を評価した研究。介護を必要とする施設入所高齢者188人を対象に、45人の医療従事者と3人の歯科医師が口腔ケアをした際の、OAS評価はCronbachアルファ値によって、それぞれ信頼性と妥当性が検証された。
口腔ケア教育研究	歯科トレーニング	23)	Jordan R(2012)	3つの高齢者施設で看護者に歯科トレーニング4ヵ月間実施し、その後、簡易口腔健康状態検査Brief Oral Health Examination(BOHSE)によって介入効果を評価した研究。特養に入所中の53人の高齢者を対象に実施した。トレーニング後は、看護職員のcompetencesが改善することが示された。
	オーラルケア教育	24)	Park MS(2011)	口腔ケア教育がおよぼす影響について、介護者介入群27名と対象群26名が、6週間オーラルケア教育を受けた。介入群は対象群に比べ、介護者の知識と行動、ケアの態度に有意差が認められ、口腔ケア教育プログラムは介護者の知識、態度、行動変化を強化した。
	口腔衛生コースの受講	25)	Forsell M ら(2010)	高齢者施設の職員に口腔衛生のコースを受けた後、口腔衛生に対する態度と認識についてアンケート調査をした。職員は、口腔ケアを実行する時間があつたが、仕事を不快であると思ったという意見があつた。職員の中のこれらの態度と認識は口腔衛生教育の後も変化なく、施設スタッフの認識に働きかける教育の必要性が示唆された。
	誤嚥性肺炎予防反復教育プログラム	26)	Kullberg E ら(2010)	特養の介護職員を対象とした(誤嚥性肺炎)を軽減させる反復教育プログラムの効果を評価した研究。43人の特養に居住する高齢者に対し、看護スタッフへ1.5年間歯科衛生士教育を繰り返した後、歯肉出血スコア(p<0.001)、ブランクスコアが減少した(p<0.001)。繰り返しの歯科衛生教育は、歯の衛生状態を改善し、医療費を削減する。

表2 海外文献 (つづき)

現状調査	口腔健康と誤嚥、肺炎に関連した調査	27)	Jablonski RA (2017)	誤嚥障害のある特養に居住している高齢者の口腔ケアと口腔の健康不良を調査し、口腔ケアプロトコルを検討した研究。継続的な口腔ケアの義務化や実施訓練などの看護方針の重要性が示唆された。
		28)	van der Maarel-Wierink CDら (2014)	オランダの119の施設、65歳以上の8119人を対象とした、肺炎や誤嚥性肺炎に関する、入院率、罹患率、死亡率の調査。肺炎や誤嚥性肺炎は、入院率、罹患率、死亡率調査の高い原因となっていた。751人(9%)の住民に主観的嚥下障害が見られ、「栄養失調」「認知症」「神経系障害」「脳血管疾患/片頭痛」に関連していた。虚弱な高齢者におけるより良い洞察力(主観的)は、嚥下障害の有病率を早期に改善する可能性がある。
		29)	Wang TFら (2012)	特養入居中781名の咀嚼・嚥下障害の問題に関連する要因について調査した。口腔の健康状態を評価する訓練を受けた看護師が、認知能力尺度、社会的関与指数、日常生活活動を調査したところ、咀嚼や嚥下に問題のある人345人で女性が多い傾向があった(オッズ比[OR]=1.51)。居住者の咀嚼と飲み込み問題は非経口/経腸摂取、経口投与、健康状態、栄養状態、付随する疾患と感染、認知機能とも関連していた。
	栄養摂取状況調査	30)	Tannen Aら (2012)	2930人の病院患者と5521人の老人ホームの高齢者を対象とし、栄養摂取量の減少の現状と原因を調査した研究。栄養失調の蔓延は広範囲に及んでいると報告されている。老人ホームの入居者58,4%は十分な栄養摂取量を確保する必要があった。十分な栄養摂取を確保し食欲の喪失や栄養失調を防ぐための適切な介入が必要である。
		口腔の健康と生活状況の関連を調査	31)	Park MSら (2010)
	32)		Lee YS, (2016)	韓国の低所得者の口腔の健康状態と口腔の保健活動の特徴を調査した研究。9,660人の低収入の高齢者の歯の健康管理、生活状態とオーラルケアサービスへのアクセスしやすさに関連した要因を調べた。低収入の高齢者の約68%は、自身は口腔の健康を認識していたが、31%は歯科サービスへのアクセスは困難であると報告した。サービスが不十分な高齢者のためのデンタルケア・サービスの利用を促進する戦略が必要であることが示唆された。
	33)		Lee KHら (2016)	327人のコミュニティに居住する高齢者の口腔衛生について評価した。重度の認知障害がある高齢者の口腔の健康は、歯磨きやフロスの頻度が低下すると口腔健康状態が悪化していることを成績は示した。重度の認知障害のある高齢者の口腔の健康を維持するには、定期的な歯みがきが有望であることを研究は示唆した。
	口腔ケア実施者と対象者の意識・態度調査	34)	Nitschke (2010)	在宅療養サービス利用者と長期ケア施設入居中虚弱高齢者(n=172)の口腔健康利用パターンと、ケアしている介護スタッフ(n=320)の利用パターンと対比させた。介護スタッフのうち35,7%が高齢者の口腔衛生は重要と考えていたが、55,3%は自身自身の口腔健康をより重要と考え相互間のギャップがあった。
		35)	Goh CE, (2016)	特養の介護者の口腔ケアへの視点とケア態度の決定要因を調査した研究。94人の介護者にアンケートを実施した。評価アンケート項目は、介護者の態度、主観的規範、行動理論、知覚された行動制御について、経験年数、口腔トレーニングの受講、口腔衛生行動などを調査した。介護者は口腔ケアの実施には前向きであったが、介護者の半数は口腔トレーニングを受けずに口腔ケアを実施する自信がないと答えた。

※特養：特別養護老人ホーム

ケアへの拒否や家族の協力不足などであることがわかった。

海外文献は、現状調査と介入研究が双方とも偏りなく実践され、現状調査では、口腔健康と誤嚥・肺炎<sup>28)</sup>、生活状況<sup>32)</sup>、意識・態度の調査と幅広く実践されていた<sup>34),35)</sup>。介入研究は、器質的、機能的口腔ケアの評価がなされており、いずれも、細菌数や唾液のpHなど客観的な指標で評価がなされており<sup>17)~19)</sup>、重要な資料となる研究であった。

口腔ケア教育介入研究は、いずれも基準化されたオーラルケア教育などが継続的に実践されており、効果が示されていた<sup>23)~26)</sup>。海外文献は、尺度評価に関する研究が散見され、尺度をあらゆる対象で検証することや、改訂版を開発することに関しても、先進的であると考えられる。

## 2. 今後の口腔ケア看護実践への示唆と課題

在宅高齢者の口腔ケアは効果的であるが、口腔内の汚染は残存していることが示唆され、積極的な介入研究とエビデンスの蓄積が必要である。

客観的評価のためには、精度の高い尺度や評価項目を用いる必要性や確保が困難な在宅高齢者へのアプローチ方法、多職種連携方法についても

考慮が必要である。

在宅高齢者の口腔ケアを妨げる要因は、実践者の教育不足が考えられる。また、ケアを受ける側には、認知の問題がある可能性もある。在宅で生活していても効果的な口腔ケアが高齢者に行き渡るような取り組みが今後の課題である。

## 利益相反

著者全員に、開示すべき利益相反はない。

## 引用文献

- 1) 総務省 統計。  
<https://www.stat.go.jp/info/link/index.html>. (2018.9.15)
- 2) 田中志子,出雲祐二,工藤久他:口腔の健康が全身の健康へ及ぼす影響. 8(1),3-8, 2008
- 3) Yoneyama T, Yoshida M, Matsui T, *et al*: Oral care and pneumonia. Lancet, 345, 515, 1999
- 4) Yoneyama T, Yoshida M, Ohru T, *et al*: Oral care reduces pneumonia of elderly patients in nursing homes. JAGS, 50,430-433, 2002

- 5) Yoshino A, Ebihara T, Fujii H: Daily oral care and risk factors for pneumonia among elderly nursing home patients. *JAMA*, 286, 2235-2236, 2001
- 6) Kikutani T, Enomoto R, Tamura F, *et al*: Effects of oral functional training for nutritional improvement in Japanese older people required long-term care. *Gerodontology*, 23, 93-98, 2006
- 7) 寺島涼子: 家族介護者が行う在宅要介護高齢者の口腔ケアと口腔衛生状態との関連. *日本口腔ケア学会誌*, 7(1), 36-42, 2013
- 8) 川上彩子, 土田恵, 萩あや子: 在宅高齢者における後期高齢者の口腔ケアの実態. *日本看護研究学会雑誌*, 31(3), 229, 2008
- 9) 森崎直子: 在宅要介護高齢者の口腔状況と口腔ケアにステークホルダー. *地域ケアリング*, 18(3), 75-79, 2016
- 10) 森崎直子: 在宅要介護高齢者の構音機能と口腔体操実施との関連性—オーラルディアドコキネシスを用いた調査—. 第45回日本看護学会論文集, 155-158, 2015
- 11) 前田恵理, 中本幸子, 池田匡他: 高齢在宅療養者の口腔内微生物—経口摂取群と非経口摂取群—. *日本看護科学会誌*, 31(2), 34-41, 2011
- 12) 森みずえ, 渡部節子, 金嶋祐加他: 神奈川県下の在宅要介護高齢者における口腔ケアの実態. *日本環境感染学会誌*, 31, 377, 2018
- 13) 岡田忍, 西尾淳子, 森恵美他: 歯科専門職との連携による更年期女性と在宅高齢者の口腔ケアの質の向上に関する研究. *地域ケアリング*, 19(8), 90-94, 2017
- 14) 今福恵子, 川村佐和子, 富安真理他: 訪問看護師による脳血管障害後遺症者の口腔ケアに関する検討. *せいらい看護学会誌*, 3(2), 49, 2013
- 15) 新井香奈子, 坂下玲子, 上手道子他: 口腔機能向上を促す支援プログラムによる高齢者の口腔保健行動の変化. *UH CNAS RINCPC, Bulletin*, 19, 69-81, 2012
- 16) 松岡聖子: 日常的口腔ケアの定着が入所者の自立への意欲を引き出した. *コミュニティケア*, 11(13), 26-29, 2009
- 17) Kim JO, Kim NC: Effects of 4% hypertonic saline solution mouthwash on oral health of elders in long term care facilities. *J Korean Acad Nurs*, 44(1), 13-20, 2014
- 18) Nam M, Uhm D: A comparative study of the effects of intra and extra circumoral exercise for older people on oral health at nursing homes. *J Adv Nurs*, 72 (9), 2114-2123, 2016
- 19) Park Y, Oh S, Chang H, *et al*: Effects of the Evidence-Based Nursing Care Algorithm of Dysphagia for Nursing. *J Gerontol Nurs*, 41 (11), 30-39, 2015
- 20) Jablonski-Jaudon RA, Winstead V, Jones-Townsend C, *et al*: Revising the Resistiveness to Care Scale. *J Nurs Meas*, 24(2), 72-82, 2016
- 21) Ergül S, Akar GC: Reliability and validity of the Geriatric Oral Health Assessment Index in Turkey. *J Gerontol Nurs*, 34(9), 33-39, 2008
- 22) Yanagisawa S, Nakano M, Goto T, *et al*: Development of an Oral Assessment Sheet for Evaluating Older Adults in Nursing Homes. *Res Gerontol Nurs*, 10(5), 234-239, 2017
- 23) Jordan R, Sirsch E, Gesch D, *et al*: Improvement of oral health care in geriatric care by training of nurses and nursing assistants for the elderly. *Pflege*, 25(2), 97-105, 2012
- 24) Park MS, Ryu SA: The effects of oral care education on caregivers' knowledge, attitude & behavior toward oral hygiene for elderly residents in a nursing home. *J Korean Acad Nurs*, 41(5), 684-693, 2011
- 25) Forsell M, Kullberg E, *et al*: A survey of attitudes and perceptions toward oral hygiene among staff at a geriatric nursing home. *Geriatr Nurs*, 41(11), 435-440, 2010
- 26) Kullberg E, Sjögren P, Forsell M, *et al*: Dental hygiene education for nursing staff in a nursing home for older people. *J Adv Nurs*, 66(6), 1273-1279, 2010
- 27) Jablonski RA, Winstead V, Azuero A, *et al*: Feasibility of Providing Safe Mouth Care and Collecting Oral and Fecal Microbiome Samples from Nursing Home Residents with Dysphagia. *J Gerontol Nurs*, 43 (9), 9-15, 2017

- 28) Van der Maarel-Wierink CD, Meijers JM, De Visschere LM, *et al*: Subjective dysphagia in older care home residents, a cross-sectional, multi-centre point prevalence measurement. *Int J Nurs Stud*, 51(6), 875-881, 2014
- 29) Wang TF, Chen IJ, Li IC: Associations between chewing and swallowing problems and physical and psychosocial health status of long-term care residents in Taiwan. *Geriatr Nurs*, 33(3), 184-193, 2012
- 30) Tannen A, Schütz T, Smoliner C, *et al*: Care problems and nursing interventions related to oral intake in German nursing homes and hospitals. *Int J Nurs Stud*, 49(4), 378-385, 2012
- 31) Park MS, Ryu SA: Degree of dry mouth and factors influencing oral health-related quality of life for community-dwelling elders. *J Korean Acad Nurs*, 40(5), 747-755, 2010
- 32) Lee YS, Kim HG, Moreno K: Xerostomia Among Older Adults With Low Income, Nuisance or Warning? *J Nurs Scholarsh*, 48(1), 58-65, 2016
- 33) Lee KH, Plassman BL, Pan W, *et al*: Mediation Effect of Oral Hygiene on the Relationship Between Cognitive Function and Oral Health in Older Adults. *J Gerontol Nurs*, 42(5), 30-37, 2016
- 34) Nitschke I, Majdani M, Sobotta BA, *et al*: Dental care of frail older people and those caring for them. *Clin Nurs*, 19(13-14), 1882-1890, 2010
- 35) Goh CE, Guay MP, Lim MY, *et al*: Correlates of attitudes and perceived behavioural control towards oral care provision among trained and untrained nursing home caregivers in Singapore. *J Clin Nurs*, 25 (11-12), 1624-1633, 2016

## A Study about the Oral Care of Elderly People at Home that Literature Review and Issues of Nursing in Japan and Abroad

Keiko Miyasaka

*Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Community Health and Home Care Nursing*

Rika Matsuo

*Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Community Health and Home Care Nursing*

Tomi Yamanaka

*Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department*

Mami Miyazono

*Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Community Health and Home Care Nursing*

Key Words 「Home care, Oral health, Nursing, Aged:65+ye」

This study aimed to grasp the tendency of research on the oral health of elderly people and to obtain suggestions for future nursing practice through domestic and foreign literature on oral care for elderly who take home care. In the domestic literature, 10 cases searched and selected by using the medicine central journal Web as keywords of "home" or "oral care", overseas literature is, by Pubmed-NCBI with "home care" "oral health" as a key word. We searched analyzed 19 cases. Most of the domestic literature was the current situation survey. Intervention in overseas literature research contents were divided into "oral care method", "oral care education", "oral care scale". Domestic research is often in the stage of grasping the current state before the intervention study, suggesting the necessity of accumulation of evidence through aggressive intervention research as a future oral care research issue for elderly people at home.